

## 第9章 慶応義塾高等学校と慶応義塾女子高等学校

### 創部50周年によせて

前高校部長 森谷 雅美

創部50周年をむかえ心より祝意を表す。今年は塾の体育会100周年のお祝いをする年でもある。他のクラブに比べるとまだ若いクラブではあるが。今三田体育会名簿を前にして、半世紀にわたりバドミントンを通して塾を卒業された先輩諸氏の名前を拜見していると、その絆の強さ又年月の流れの早さにひとしおの感慨をおぼえる。

塾に高等学校が開校されたのは1948年4月、その翌年に高校バドミントン部が創部されている。まだ食糧も充分にない頃である。小生も高校の合宿場所をわざわざ新潟県にえらび、帰りに米を買ってきたのがつかしい思い出がある。練習場も幼稚舎、普通部等転々としたと聞いている。しかしそれも今となってはなつかしい思い出となっていることであろう。物が充分にない頃のほうが、精神的にも肉体的にもより鍛えられるのではないかと思うこの頃である。63年に日吉の記念館が竣工、練習場は確保された。現在は暗幕もつけられ、外光になやませられた先輩にはうらやましい限りであろう。

高校の40年記念誌の部長一覧を見ると、

小松光義 (美術)	49年
瀬名貞利 (数学)	50年～51年9月
小林忠右八 (英語)	51年11月～53年
川上宏一郎 (国語)	54年～60年
奥野泰雄 (国語)	61年～63年
森谷雅美 (英語)	64年～86年
江口芳雄 (生物)	87年～

各先生が歴任されている。小松先生は90年、奥野先生は80年に定年退職されている。奥野、川上両先生は、小生塾に就職した時の主事でもあり公、私共々大変お世話になった。残念ながら川上先生は74年11月物故なされた。先生にはなつかしい思い出がある。当時先生は生徒生活担当の主事であった。夏の合宿を日吉で行った。合宿所が日吉の駅の近くの神社の建物で、今なら考えられない程のあばら家であった。最終日生徒が打ち上げのつもりで、ビールを飲んだのである。冷えて

もないビールを蒸し暑い夜に飲んだのだからたまらない。救急車で病院送り。小生は合宿が終わったといい気な物、我が家で休んでいた。そこに電話で病院に飛んで行ったが、生徒はまあいたこともなく一安心。「これはクラブ活動禁止になるぞ」とまっ青。夏休中なので早速藤沢の先生のお宅に急行。途中で車がパンク。「これは幸先が悪いぞ」とおっかなびつくり報告にあがると、度の強いめがねをきらっとされたが、「しっかりとやりたまえ」だけですねでした。昔の先生の太っ腹には今でも敬服している。もう20年以上も前の話である。先生も「余計なことをいいおつて」とお許し願えるだろうと思う。

高校の体育系クラブにとっても、小生にとっても一番心に残っていることは、当時1年生であった堀切治千賀君の突然の死のことである。64年11月26日、後期の中間試験が終り練習が再開され校内のロータリーのまわりをランニング中突然倒れ、関東労災病院に運ばれたが、心不全のため帰らぬ人となってしまった。部員の中では3年生を含めても脚力のある堀切君であったので果然とした。当時就任早々でもあり、奥野、川上両主事、クラブの先輩には大変お世話になった。それまでの身体検査は身体測定のようなものであったが以後、入学時には心電図の検査等行なうようになった。毎年何人かは、心臓に異常がある生徒が発見され、適切な対応がなされている。堀切君の死は非常に不幸なことであったが、以後の体育会、学校の生徒の健康管理の基礎をつくったのである。堀切君の冥福を祈る。

塾の体育会の活動は、高校と大学の合せて7年間で考えることが最もよいと常々考えている。その点で大学のバドミントン部の高校にたいする配慮にはいつも感謝をしている。部長時代には毎年元旦に大学生が年賀に来てもらい恐縮したものである。我が家で食卓を囲み大学から入った塾生とも知り合うことが出来、大いに飲み食いました。今だに親しくおつき合いをさせてもらっている。どこのクラブでも大学と高校の関係が円滑にいつているものではなく、この点で我がクラブは誇るにたるクラブであると確信している。クラブ活動は先輩から後輩、上級生から下級生へと縦の関係が連続と続いていくもので、塾風の柱の大事な1つになっている。今後とも高校の面倒を見てほしい。

「栄枯盛衰は世の常」現在我が部は苦しい時代にはあるが、若き塾生は情熱をかたむけて、部の将来のため活躍してほしい。

現部長の江口先生は藤沢に新設される学校に転属されることになっている。長く部長をされることを期待していたが、残念である。新しい先生が就任されるが、小生も側面から応援していくつもりである。

## 私の塾高バドミントン部の思い出

鎌田 喜久 (昭和56年卒)

私が塾高のバドミントン部に入部したのは1973年のことである。当時、私は、普通部2年よりバドミントンを始め、多少はシャトルが打てるような状態であった。また、バドミントンの面白さが少しづつ分かり始めたころでもあった。元来、運動はとても好きな方であったので、入学と同時に入部した。普通部時代には、よく塾の先輩らが普通部にもコーチにいらしていただきその延長上で入部したような気がする。

最初に、高校のバドミントン部に入って驚いたことは、日吉会堂の大きさであった。それまでは、普通部の体育館でしかバドミントンをやったことがなく、天井の低い体育館で大きなクリアーを打つというのも天井につかえていたのを覚えている。それが、日吉会堂ではいくらか打っても届かないのである。時にはその体育館の大きさがいま思えてきたこともあった。しかし、恵まれた環境の中で、多くの練習ができたことを今に思えばありがたく感じている。

普通部時代は、対外試合といったものは一度も経験がなく、いつも部内のもので練習試合をしていた。又、その当時は、県の中学生の大会などもなかったように記憶している。その為、自分の実力がどの程度なのかも全然わからなかった。しかしながら、中学でバドミントンをやっている学校も多くなく、塾高バドミントン部に入って多少はシャトルが打てるということで人数も少なかったことも手伝って春の関東大会予選からレギュラーとして試合に出ることができた。この頃の大会は逗子の開成高校やその他の体育館で行うことが多く、日曜日には、いろいろな所へ出かけていった。逗子での大会は、とても楽しみでそれというのは、毎回横浜から行く際に、駅で売っている暖かいシユウワフイ弁当を2つ買い、1つを行きの電車の中でたいたら、もうひとつの弁当をお昼に食べた。しかしそれでも足りずに先輩方からいろいろなものをおごってもらっていたように思う。この頃の試合は、地区予選などはなく県予選から始まっていた為、出場校が一堂に会して行われ、コート数も少なかった為なかなか順番が回ってこず、朝一番から1日待って1試合目が始まるのがもう陽が傾きかけていたということも多かった。それでも試合に行くのはとても楽しみであった。1年のときの新人戦では春からレギュラーで出ていたということで、シ

ングルスで第1シートとなった。この時も大変で、大会初日は順番が回ってこず、1日体育館でアップをしたり休んだりしながらとうとう1試合も出番がなかった。大会は2〜3週に渡って行われ、最終的には、決勝戦まで進んだが、決勝戦で日大の選手に負けてしまった。しかし、準優勝の賞状をもらい、これが私のバドミントンでもらった賞状の一番最初のものであった。

塾校時代の練習の思い出は余り鮮明ではない。それというのも余り練習が好きでなかったし、できるだけサボって済ませようとしていた方であった。それでも何となく体育館には毎日のように出向きシヤトルを打っていたような記憶がある。しかし一番の思い出は、合宿である。その当時は、春、夏、冬と行っていた。春と冬は主に日吉で行い、夏は地方に出かけて行った。日吉での合宿は、教室に机を並べその上に布団を敷き寝泊まりした。又、まむし谷の空手道場を借りて行ったこともあった。冬の合宿はとにかく寒くとても閉口したのを覚えている。合宿での練習は普段の練習に比べてとても量が多く、いつも早く終わらないかと思っていた。しかし、仲間と一緒に乗り切って行った爽快感は今でも鮮明に覚えていて、楽しいものであった。日吉での合宿の時は、OBの方々や塾のバドミントン部の先輩たちにたくさん来て戴きいつも活気のあるものであった。その当時はとてもうつうつとした感じ、しかしながら何とかやっつけてやるうと必死にやっていた。しかし所詮高校生のレベルでは太刀打ちできず、くやしい思いをした。それと同時に先輩方のプレーを何とかまねて自分のものにしたかった。

地方での合宿は、日吉にいるときと一味違い独特のものであった。普段やり慣れている日吉の体育館とは違い、いろいろと経験することができた。又、旅先での解放感もあり、バドミントン漬けの毎日でもあり、とにかく楽しかった。しかし、真夏の暑い時期の練習であり、体力的にはとてもきつかったと思う。そんな中でやはり毎日やっていたのは良きメンバーに恵まれ、一緒にやってきたからである。私はいつも率先して練習をサボる方であった。あれは確か3年のときの猪苗代湖での合宿であったと思う。宿舍が体育館と距離があり、練習後は毎日宿舍までランニングをして帰って行った。私は、ランニングが大の苦手で、いつもびりの方であった。ある日、同期のやつを巻き込み、宿舍までのランニングをヒッチハイクをして帰った記憶がある。当然、車で帰ったものだから皆を途中で追い抜き、宿舍の近くで隠れていたのを覚えている。

塾校での大きな試合の1つに毎年行われる慶早戦がある。私は好運にも1年の時から試合に出場することができた。この頃の塾校は早稲田に対し連勝を続けていた。慶早戦は、1種独特の雰囲気のある試合で、これは両校に学んだものでしか味わえないものである。打倒早稲田のもとに夏の練習を乗り切り一生懸命試合に臨んだ。夏の終りのひとときに汗を流し、懸命にシャトルを追いかけ、試合をしていたのを昨日のように覚えている。幸いにも私の在学中にも早稲田に敗れることなく卒業できたことは、いまだに光榮に思っている。

## 女子高バドミントンの思い出

元女子高部長 武永茂里江

私が女子高へ勤めて3年目に、バドミントンの部長を引き受けましたが、バドミントンのルールも全く知らない上に、育児の最中でもありましたため、今にして思えば責任者としては本当に相応しくなかったと、深く反省しています。しかし、女子高生のひたむきな練習風景を目の当たりにして、自分の部長としての責任感を逆に教えられたような気持でした。部員の人数は大体18人位でしたが、コーチの厳しい指導にもよく耐えて頑張るので、部活の経験の無い私には、ただ感動するばかりで、お嬢さん育ちの女子高生にこんな逞しさもあったのかと、別の1面を発見した思い出でした。

部長在任中に印象深かったのは、昭和47年頃の新人戦のことです。シングルスでコートに入ったMさんは、大きな目で相手を睨みつけ、その気魄は物凄く、相手の虚をつく矢のようなスマッシュが面白いように決まって、快勝しました。私たちも汗びっしょりになって応援しましたが、本当に胸のすくような喜びを味わいました。このような試合はまだまだ沢山ありました。家に用事を残して、少々重い気分でお掛けた日もありましたが、素晴らしい試合に感激して、良い部を持った喜びに忽ちかき消されてしまいました。

春・夏の合宿の中で思い出深いのは、バドミントンの大先輩でいらつしやる兵藤先生のご紹介で、箱根の1流ホテルを使わせて頂いたことです。まだ日本経済も現在ののように豊かでない時代に、女子高生の合宿には勿体ないようなホテルで、しかも格安の料金でお泊め頂き、10年位も続いてお世話になりました。その間、体育会の人達や女子高の卒業生が、いつも大勢来てくれて、親身になって指導をしてくれま

した。慶応義塾の体育会の一員として、大きな恩恵を受けることは、大変な難いことでしたし、慶応の人達の絆の強い校風に触れて、女子高の部長として何とお礼を申してよいか、感謝の気持ちで一杯でした。幼い子供を連れての合宿もありましたが、生徒達はその事情をよく理解して、気持ちよく接してくれたことも嬉しい思い出です。

また、それぞれの年に活躍した人達を思い浮かべますと、運動神経の抜群に優れたKさん、基本に忠実にシャトルを打ったら必ず中心に戻っているフットワークの達人のIさん、粘りに粘ってピンチに強い大い神経の持主のNさん、頭脳プレーのSさん、Oさん、そして外部との連絡や、合宿の段取り一切を引き受けて、クアラをしつかり支えてくれた名マナージャー達、皆懐かしい人達ばかりです。

歳月のたつのは早いものです。最初に担当した人達は50才位の年齢になり、最後の部員でも25才になりました。折々に頂く便りには、お子さんの話や、職場の苦勞話、また同期のお仲間が集まった時の様子等、知らせて下さって本当に心が和みます。

最後に、女子高バドミントン部にお力添えを下さった体育会の皆様へ、改めてお礼を申し上げ、これからもよろしくご指導の程お願いします。併せて創部50周年の伝統ある体育会バドミントン部のご発展を、心からお祈り申し上げます。

---

## 女子高バドミントン部の思い出

松尾 (松田) 有代 (昭和57年卒)

女子高バドミントン部と言われて、まず頭に浮かぶのは、「楽しかった」という事です。大学での4年間は、充実したものではありませんでしたが、楽しいということばかりではなかったような気がします。女子高の1年の時、はじめてラケットを握った訳ですし、ほとんど戦績と言えるほどのものは残せませんでしたか思い出深い、楽しい3年間でした。

そのひとつには、なんとと言っても同期の仲間がたくさんいたことだと思います。1年生の時、11人入部し、卒業の時は、7人でした。その後、プレーヤーとして、大学で続けたのは、結局私1人でしたが、その7人とは、バドミントンを離れても、つきあい続けています。卒業後、14年もたった今でも、外国在住の2人を含めて情報交換のノートを回しています。今では、それぞれ状況もすっかりかわり、話題の

中心は子育てとなっていました。一緒に泣いたり、笑ったりした仲間とは、何でも話せる気がします。

女子高バドミントン部が、楽しかったもうひとつの理由は、コーチの方々に恵まれていたことです。私たちの代は、3年間、毎年違った個性の3人の方々に教えていただきました。いずれも、大学の体育会の方で、当時は来ていただくのがあたりまえのように思っていました。考えてみれば、体育会の部員でありながら、女子高の練習にも出ていただくのは本当にたいへんなことで、改めて感謝の気持ちがいってきます。

1年ときの高橋龍太郎さんは、悲しいほどやさしい方で、おこられた事など全く記憶にないくらいです。物静かで地味な方でしたが、私たちは、初めてのコーチということもあり、たいへん慕っていました。高橋さんの最後の練習の時は、それぞれ新しいシャトルを1つずつ使ってクリアーを打っていただき、それを宝物のように持ち帰ったという思い出もあります。

2年生のときの伊藤泰さんは、知的で理論的でした。練習内容も厳しかったけど、またご自分にもたいへん厳しい方でした。心使いがこまやかで、私たちそれぞれの心の中まではいりこんで、相談にのって下さいました。何でもわかってくれる頼れる“お兄さん”のようなコーチでした。

3年生の時の小野勝彦さんは、とにかく、明るくて、おもしろい方でした。いつも冗談ばかり言っていて皆を笑わせてくれていました。とかく暗くなりがちなバドミントン界にもこんなに楽しい方がいたのかとびつくりしました。小野さんが早慶戦に出場された時は、自分のことのようにドキドキして、皆で最前列に陣取って、応援した事を覚えています。

当時の練習は、女子高の体育館で2回と土曜は日吉で1回の週3回でした。女子高の体育館は天井は高く設備は整っていましたが床が固く冷たいコンクリートでした。そのため、どんなにうさぎとびをしても何故かこわれない強靱なひざの私以外は、ほとんどの人が足を故障して、サポーターをしていました。また土曜日は、記念館におじゃまして、大学生のプレーを見たり、教えていただけるのは楽しみでした。ただ日吉は走る所がたくさんあって同時に恐怖でもありました。練習日が少ない分、朝早く行って壁打ちをしたり、昼休みにトレーニングをしたり、それなりに必死でやっていました。

高校から始めたので、3年になってやっとゲームの面白さがわかり

かけてきたところでした。そして、最後の団体戦の試合で負けた時、トイレで泣きながら体育会で続ける事を決意しました。あの頃は、自分の無限の可能性を信じていたんですね。きっと。

今後も女子高バドミントン部の後輩の方々が楽しい3年間を過ごし、そしてまた大学でも続けて下さることを、1OGとして心から願っています。